

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじお5・5

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 10 二〇二一年十二月二十日

## 貴方がたの島へ

小林章子（RSKアナウンサー）

伊藤正弘（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらつしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。今日もよろしく願います。

白根 こんにちは。よろしく願います。

小林 さて、今日はどんなお話でしょうか。

白根 永瀬さんは、戦後間もない頃から、長島愛生園・邑久光明園・大島青松園の入所者の方々と詩作を通じた交流をしていました。今日は、永瀬さんが長島愛生園の機関誌『愛生』に発表した詩を紹介します。

貴方がたの島へ

貴方がたの島へ

私は何かを受けとりにゆくのです

いつも人々からの愛を受けとつて

精神こころは着ぶくれてゐる貴方がたから

私は何かをうばひにゆくのです

さあ私に何かを下さい、病める人々よ。

私はいたゞきに来ました。

この島へ来る人々は

いつも愛の言葉を置いてゆく。

私の愛はごくお粗末、

それであて私は貪欲に

貴方がたからいたゞきたいのです。

なぜなら私は施ほこしを患わづむだけではあき足りない。

私に喜びを下さい。

血泥の病気をいたましく思つたり、

呻うなきや涙をあはれんだりするだけではまだ足りない。

私は同情しにゆくだけではいやです。

私に見せて下さい、立派なお友達であるあかしを。

貴方がたは何を私に贈くれやうと心配なさる。

肉体の病気の中にくじけぬ人間、

ありとあらゆる苦しみの涙と膿汁の中の助け合ひ、

昼夜なき痛みや不自由の中の雄々しいのち

さうしたものを見出して私はふるひ立つのです。

願ねがくば私を喜ばせ勇気を下さい。

それを下さつてこそ貴方がたは私の友達。

くじけずひるまず暮す人々を見ることこそ私の喜び。  
さあ私に沢山のことを贈って下さい。

〔『愛生』第五巻第十号 一九五一年十月〕

**伊藤** この詩を聞きまして、私はセンチシヨナルだと思ったんですけれども、永瀬さんが長島愛生園に実際に行って不遇な扱いを受けてしまった中で、がんばる姿を見て元気をもらっていたんじゃないかと思いました。

**小林** 何度も足を運んで、信頼関係ができていたからこそその強い言葉だったのではないかと想像します。ハンセン病については、かつて根強い差別があったことが知られています。永瀬さんはどのような思いで詩の指導に通っていらっしやったのでしょうか。

**白根** 永瀬さんは、詩にあるように「貴方がたは私の友達」と、入所者の皆さんは詩を書く友達という思いで通っていらしたと思います。そして、入所者の方々が書いた詩を選んで『愛生』に載せたり、泊りがけで長島愛生園や邑久光明園を訪れたりしていました。

**小林** 永瀬さんから詩の指導を受けた、長島愛生園の入所者の方の声がRSKに残っていました。二〇一〇年に取材したときの音声です。永瀬さんの印象についてうかがっています。

田舎のおばさんというか、おかあさんというかな。おふくろさんというような感じじゃったな。

人間的に平等な考えを持って接してくださるような、どうしてもこの病気は、郷里とかふるさととか兄弟とかいうことに、迷惑かけるところとところで、つい、リアルなところをカットすることが多いからな。うん。そういうことがいわれたことがあります。た。ザラザラした作品を書いたほうがいいんじゃないかって。あんまり作品がまとまりすぎとつてもいいことないっていうことは言われましたですね。自分たちが差別とか偏見とかにさらされとるだけに、やっぱり人間的な情のある人だなと今でも思っておりますね。

**小林** ハンセン病に罹ったために、ふるさと・家族から引き離されて暮らすことを余儀なくされた、その経験を通して感じたことを、作品にするようにと声をかけていらっしやったんですね。

**白根** 永瀬さんは、長島愛生園の機関誌『愛生』で詩の選者をし、選評を書いています。いくつかを読んでみますと、よいところ、考え直したほうがよい言葉などについて、例を示しながら具体的に書かれています。

**小林** さきほどのインタビューにあった「ザラザラした作品を書くように」という永瀬さんのアドバイスは、今日ご紹介した詩「貴方がたの島へ」の後半にあるような「肉体の病気の中にくじけぬ人間」、「昼夜なき痛みや不自由の中の雄々しいのち」を、詩として昇華しましょう、ということでしょうか。

**白根** そうだと思います。永瀬さんは、詩もそれを書いている人も

時と共に進んでいくこと、つまり、よりよくなっていくことを願っていました。こうした思いが「私は同情しにゆくだけではないやです」「くじけずひるまず暮す人々を見ることこそ私の喜び」といった詩の言葉になり、入所者の方が「人間的に平等な考えを持って接してください」と感じていらしたことにつながっていくように思われます。

**小林** 「同情する」という態度は、同じ立ち位置ではなく、上から見下ろしているような印象を与えることもあるのではないかと思いません。永瀬さんはそうではないのですね。

とはいえ、「私は何かをうばひにゆくのです」という強い言葉を、入所者の方はどんなふうを受け止められたのだろうかと考えます。

**白根** この詩では、着ぶくれるほどの多くの愛を受け取る「貴方」に対して、「私」は愛を届けるだけではなく「貴方」から「うばひにゆく」ことに驚かされます。お互いが持てるものをわかちあおうという永瀬さんの心意気が表現されており、その点でも「人間的に平等な考えを持って接してください」と感じられたのではないのでしょうか。

**小林** この「貴方がたの島へ」の最後、「貴方がたは私の友達。／くじけずひるまず暮す人々を見ることこそ私の喜び」という言葉から、永瀬さんがそうした関係望んでいらしたことが感じられますね。

**白根** はい。昭和六十三年には、瀬戸大橋とともに人間回復の橋と呼ばれる邑久長島大橋が架かりました。このとき、永瀬さんは「詩とはもともと橋かける事なのではないか。自己と他者との。或いは自

己と社会との」と書いています。つまり詩とは、自分と他者と私たちが生きる社会などを結ぶ架け橋になるものだ、ということですね。さらに、「対岸への橋は架かって、『社会』の人はもう決して差別しないかどうか？彼らはその病気が治るものと信じているかどうか？すべてまだまだ寂しき人々の苦は解けない」と、本当の意味で橋が架けられるのはこれからだと思入所者の方々の心を思いやっています。

**小林** 永瀬さんのそうした想いは、いまでも受け継がれていますね。

**白根** 今から三年前、平成三十年に邑久長島大橋は開通三十年を迎え、記念式典と沢知恵さんの記念コンサートがありました。沢さんは、音楽だけではなく、今年の春には、岡山大学大学院で全国の療養所の歌を研究した修士論文を発表され、まさに入所者の方や社会に、橋を架けるような活動を続けていらつしやいます。

**小林** 永瀬さんも沢さんも、相手の心を理解しよう、そしてそのことを詩や歌で表現しようとなさっていますね。

**白根** そうなんです。永瀬さんは、詩を書くときに大事なこととして「相手の心がわかること」と繰り返し語っていました。「詩とはもともと橋かける事」とは、そういうことだと思えます。特別なことはできなくても「相手の心」をわかろうとすることが、詩を読むことや書くことであり、さらには永瀬さんの心を受け継ぐことではないかと思っています。

**小林** ありがとうございます。

**白根** ありがとうございます。

※記載されている情報は、二〇二二年十二月二十日現在のものです。

〈付記〉

沢知恵さんは、修士論文の成果を岩波ブックレット『うたに刻まれたハンセン病隔離の歴史 園歌はうたう』（二〇二二年十一月）として刊行されました。

二〇二四年二月十七日に開催した第二十五回朗読会「永瀬清子の詩の世界―貴方がたの島へ」では、沢知恵さんがこれまで語られてこなかった「永瀬清子とハンセン病療養所」をテーマに、ピアノ弾き語りをされました。その翌日には、沢さんがパーソナリティを務めるRSKラジオ「日曜日の音楽室」で特集「永瀬清子とハンセン病療養所」が放送されました。

〈参考文献〉

永瀬清子「編集後記」『黄薔薇』一二二号、一九八八年六月